

# 安楽寺だより

第45号

明けましておめでとうございます。今年もよろしく  
お願いいたします。「お釈迦さまの教え」が続きます。

## 第4回 王子の「出家」

シッダールタ王子とヤシヨーダラとの間に世継ぎ  
の男子が生まれました。シッダールタは、出家して求  
道の旅に出ることを決意されました。両親や妻は納得  
せず、涙を流して嘆きました。この時王子は、二十九  
歳と伝えられています。

お釈迦さまは、後年次のように語られています。

『人びとは自分も老い・病に苦しみ・死んでいくのに、  
これについて深く考えようとしなさい』

『欲望は楽しみ少なく、苦しみ多く、悩み多いもので  
ある。欲望にはより多くの禍がある』

『私は欲望の中に患いを見て、また欲望を求める生活  
の放棄こそ安らぎあると見て、努めいそむために出  
家するのです。そこに私の本当の喜びがあるのです』

ある夜、歓楽の宴のあと、シッダールタ王子は、愛  
馬カンタカに乗り、御者チャンダカに手綱を牽かせて

紙面内容

- 2面 本山報恩講法要(坂東曲に参拝)
- 3面 安楽寺報恩講話(荒山信師)
- 4面 日本仏教史(補足) 蓮如上人

宮殿を後にしました。

城門は厳重に閉ざされていましたが、王  
子の出家を祝福する天人たちの力で難な  
く開かれました。また、蹄の音消すために

天人たちがカンタカの足をささげ持つて進  
んだと伝はつたえています。

東に向かったシッダールタ王子は、夜通し  
走り続けました。夜明けになりマイネーヤと  
いうところに着き、身に付けていた衣服や飾  
りをチャンダカに与え、粗末な服と交換され  
ました。そして自ら剣で頭髪を切り取って肉  
親への形見とし、御者と愛馬に別れを告げま  
した。

シッダールタは、しばらく歩いていくと、  
黄色い袈裟を着た獵師に出会い、衣装を取り  
換えてもらいました。こうして釈迦族の王子  
シッダールタは、出家修行者(沙門)として  
歩みを始められました。

東南に道をとって、途中の村々で食を乞いな  
がら、ガンジス川を渡り、七日間歩き続けま  
した。そして、当時沙門が多く集まっていた  
マガタ国の都・ラージャグリハ(王舎城)に  
入りました。そこで多くの最新の学問に触れ  
ようとされたのです。

## 『欲望には禍がある』



## 本当のやすらぎを求めて出家する王子

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良  
名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇  
電話 〇五二(八四一)二六〇六

# 坂東曲を終えて

## 本山報恩講に出仕 若院



若院は前から2列目手前から3人目

二〇二一年も十一月二十八日の親鸞聖人の御命日を機縁として報恩講の結願日中(けちがんにちゅうう)、そして坂東曲がお勤まりになられました。

坂東曲とは、体を前後左右に揺らしながら、南無阿弥陀仏を称え、間に聖人の書かれたご和讃(わさん)をいただく東本願寺にしか伝わらないお勤めの一つであります。諸説ありますが、聖人が越後に流罪にあわれた時に、その船の中で揺れながらお念仏を称えていたためという説が一般的にはよく言われていますが、実は坂東曲がそうだったという記述はどこにも残ってはいません。

坂東とは今でいう関東のことを指しています。

関東には聖人の門弟がたくさん居られて、その方たちが、聖人の御真影を前にしてお念仏申した時に、感極まって体を揺らしたことが由来であると言われる方もあります。

しかし、云われはどうかあれ鎌倉時代から続く東本願寺が大事にしてきた坂東曲を、今でも私たちのもとに伝えてくださった先人達の思い、そしてあれほどのダイナミックで迫力のあるお勤めは他に類を見ないものです。

是非、十一月二十八日は東本願寺で坂東曲のお勤めをお聞き頂けたらと思います。

# 本山報恩講に参拝

昨年十一月二十八日、二十六名のご門徒の皆様と本山東本願寺報恩講に参拝しました。早朝に安楽寺会館にお集まりいただき、バスで京都に向かいました。予定の午前九時三十分にご本山に到着、御影堂前の白州で写真撮影(写真下)したのち、御影堂で参拝しました。

堂内の参拝席は、ほぼ満席でした。午前十時に喚鐘が鳴った後、雅楽そしてお勤めが始まり、

参拝の皆様は、静かに参りされました。親鸞聖人の御真影(しんねい)前の仏華は見事に活けられており、一年で最も大切な法要に参拝でき、感動しておられました。

その後、昼食と散策する東山の円山公園にバスで移動しました。晩秋の小春日和で、紅葉も見ごろの時期でしたので、行楽や買い物を楽しむ多くの観光客が来られていました。

今回の団体参拝にご参加いただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。今年こそコロナ感染が終息し、安心して参拝できることを願っております。その節には、ご案内いたします。



東本願寺 御影堂前白州にて

すので、ご予約いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

# 報恩講を勤めました



安楽寺本堂を飾る報恩講の五色幕

昨年十一月十三日、報恩講法要をお勤めしました。現在コロナウイルス感染は、落ち着いた状況ですが、年末年始は警戒が必要です。法要当日は、秋晴れの陽気で、大勢のご門徒のみなさまにご参詣いただきました。  
正信偈・念仏和讃をお勤めしたのち、荒山信師（昭和区・恵林寺住職）のご法話をお聞きいたしました。

「親鸞聖人は一二六二年（弘長二年）十一月二十八日にご往生されました。それから七百年余

## 「師とは自分を言い当てて下さる人」

りに亘り、御命日法要の報恩講が勤まつてきたのは、すごいことだと思えます。仏教はご命日を大切にしています。命日を通して私が今生きている意味を考えていきたいと思えます。」

「聖人は師・法然上人を善き人と仰ぎ、自分を照らして下さる人、言い当てて下さる先生と大事にされました。」

正信偈には、『本師源空明仏教、憐愍善悪凡夫人』と申されています。法然上人は、「善悪という価値判断（ものさし）に縛られ、煩惱に明け暮れる私の生きざまを、阿弥陀様は照らして

くださっていると教えて下さいます。何事も良いと思つて（善意で）行なうことは、なかなか自らは反省できませんが、阿弥陀様から照らされて、わが身の本当の姿に気付かせようとして下さっているのです。」

「親鸞聖人のお言葉を聞いて、法然上人が『ただ念仏して弥陀に助けられまいらさずべし』と申された意味が少し理解できたように思えます。」

## 定例法話つとめる 坊守

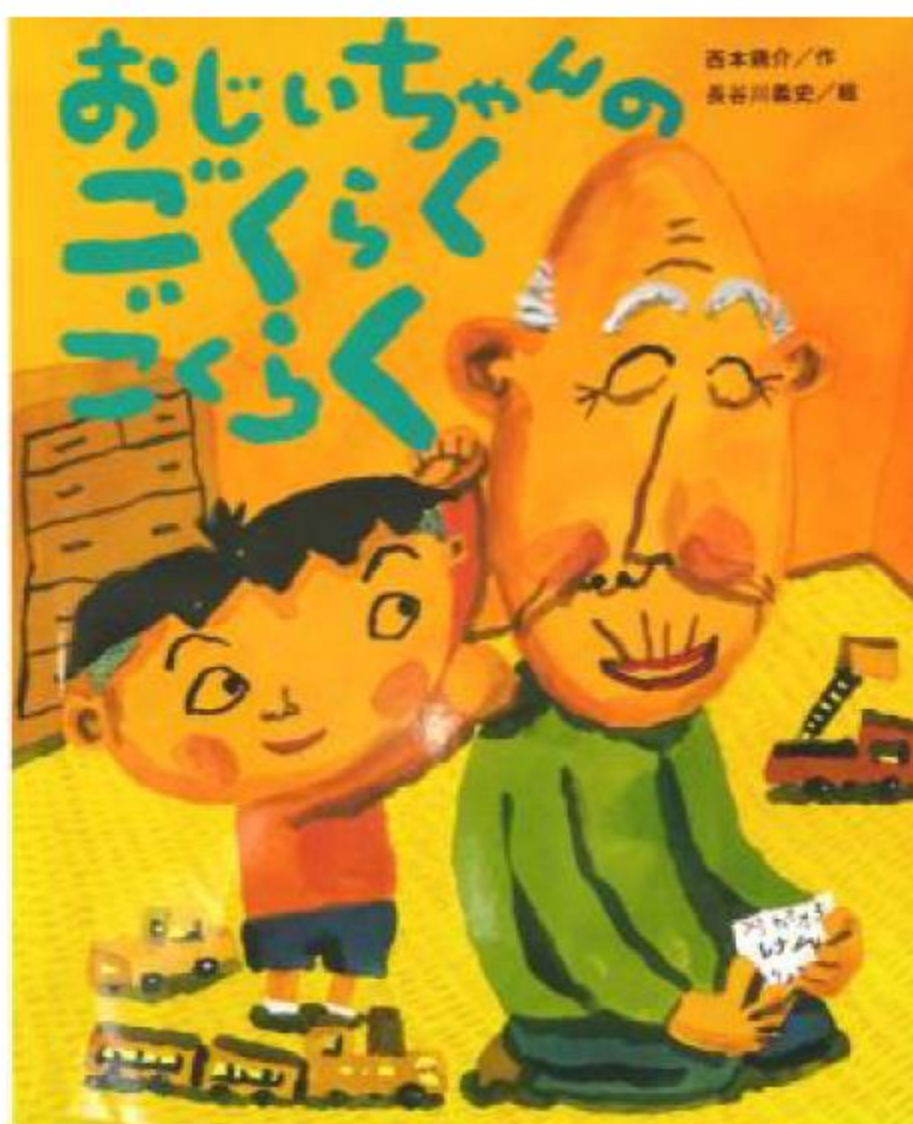
昨年十月十三日定例法話をお勤めしました。「コロナ禍の中、『不安に立つ』の意を思い起こしています。この言葉は、不安に勝つとか乗り越えるところではなく、不安をしつかりと受け止めて前に進んでいくということだと思います。人は老いや死への不安をかかえて生きています。しかし、必ず受け止めなくてはならない日が訪れるのです」

「正信偈の『煩惱障眼雖不見、大悲無倦常照我』和讃では『煩惱にまなこさえられて撰取の光明みざれども 大悲ものうきことなく て つねにわが身を照らすなり』

「そんな私たちを仏様は常に照らして くださっています。」

最後に「おじいちゃんのごくらくごくらく」の絵本を紹介させていただきました。

つたない話を多くの方に聴いていただき心より感謝申し上げます



# 仏教豆知識

第四十五回



## 日本仏教史

### 補足 蓮如上人

鎌倉時代に開創された仏教教団は、室町時代になると、社会状況の変遷もあって、布教の地を地方へ、また京の都周辺へと移りました。

その中で、覚如上人が設立された「本願寺」は、当時寂れておりましたが、蓮如上人は本願寺を全国有数の教団へ再興されました。蓮如上人の八十五年のご生涯は、仏教史のなかでも、特筆すべきご上人と思えます。

#### ① 誕生

一四一五年（応永二十二年）に、本願寺第七代・存如上人の長子として京都東山大谷の地でご誕生されました。

母は本願寺の使用人だったため、蓮如六歳のころ、父・存如が正妻を迎えることになり、母は蓮如のもとを去ら

#### ② 修学

れました。それ以後、継母・如円との確執があったに違いありません。

蓮如は十五歳で本願寺の再興を決意され、十七歳に青蓮院で得度され、比叡山や奈良で勉学に励まれました。

大谷に戻った蓮如は、父・存如について、また独学で親鸞聖人の書物「教行信証」「六要鈔」「安心決定鈔」など、浄土真宗の真髓を極貧の生活の傍ら修学に打ちこまれました。



蓮 如 上 人

コロナ感染症の拡大によって、私たちの生活はもとより政治・経済・文化・学校・医療機関などの状況が様変わりしました。▼コロナ禍で市民生活の基本である人と人の関わりが、すすんでいくのではないかと危惧しています。▼昨年より安楽寺だよりで「お釈迦さまの生涯と教え」を連載しております。お釈迦さまは、お悟りになられたあと、初めての説法に於いて「中道」について語られています。ご自身の「快樂と苦行」の体験を通して二つの極端は「利益のないもの」とされ、「中道」を教えの基本としてお述べになっています。▼「中道の教え」によって社会全体のあり方を観る眼を持ち、人びとが、両極端にころが振りきれた状態で行動することないよう戒めておられます。▼新しい年を迎え、人と人の交流が拡大し、仏教の教えが広まり、人のこころが豊かになるよう願っています。